とソフトウエアを利用して，遠隔地からの自動同定が行なえるようなシステムが紹介されている。高等植物の自働同定システムとしては，イギリスの Cambridgeshire 地区の *Rubus fruticosa* 類縁種群を電算機と対話しながら同定するプログラムが紹介されている。このシステムは学生教育用の小規模なものであるが，電算機が提示する形質群を手許の標本とくらべて撰択して，同定範囲をしぼって行けるようになっている。

Taxonomic Data for Identification には2論文が含まれ，一つは北米のあらゆる顕花植物を同一の検索システムにのせる為に，すべての種の形質を同じ形式で記録する Flora North America Program の書式が解説されている。このプログラムは検索のみでなく植物誌の自動作製をも意図したものである。これなどは莫大な予算と期間，それにすべての分類研究者の大きな苦痛（苦労だけではなかろう）の結果なされるものだろう。もう一つの論文では従来の記載文を自動同定のデータに作りかえるうえの問題点がのべられている。他に Statistical Theory, Teaching の項目で各1編および Discussion があり，最後に文献目録，関係ある電算処理プログラムの目録，自動同定に関する用語集がつけられている。

このシンポジウムが行なわれてから既に5年が経過しており，今日の電算機関係諸技術の急速な進歩を考えると，当時の future の多くは実現されている筈であり，この研究分野は遠からず最も活発な動きが期待される。我が国の分類学は系統，進化に重心がかかりすぎ，同定という多分に技術的な面はとかく軽視され勝ちであり，事実この方面の研究者は一人もいないと云っても過言ではない。同定という仕事は学説と違って，よそでいくら発展していても我が国でそれをとり入れるわけにはゆかない。特に同定のもとになるデータベースの作製は一朝一夕にできるものではなく，また研究者ばかりでなくアマチュア多数の努力にもまたねばならない。分類に理解をもち，この方面に関心をもつ若い研究者の出現を期待したい。（金井弘夫）

□ピーター・コーツ，安部薫（訳）：**花の文化史** pp. 215+7. pls. color 8 (1978). 八坂書房，（東京）¥3,200。著者は1910年にスコットランドに生まれ，第二次大戦中は南西太平洋方面連合最高司令官の副官としてインド，エジプトに従軍，その後は園芸雑誌の編集に従事した人。はじめの部分は大体三部になっていて，英国の本草家を中心として草木の取上げ方の変遷を語り，中程で植物を画いた画家にふれ，最後に18世紀以後の採集家達と栽培にうつした園芸家達の行動にふれている。リンネの標本を買った英国の軍艦をスエーデンの軍艦が追いかけたのはうそであるとか，植物の最初の正確な描写はふつうメムリング「祈る人」(1490)を挙げるが，じつはもつと古くギベルティ (1378-1455) の筆になるとか新らしいこともでてくる。それが終ってツバキ，カーネーション，クレマチス，アイリス，ユリ，モクレン，シャクヤク，ケシ，サクラソウ，バラ，チューリップ，スミレ，スイレンの13の代表的な栽培種をえらんで述べ，適当と思われる品種を説明し，それらに関する文章や逸話を語る。面白いが少々煩雑，若干の誤りもある（たとえばシデコブシが富士山の斜面にあるなど）。それにページの下方2/3にのみ組み上1/3をあけて図版を入れる様式がここ数年はやっているが全部で二十ページ強の白くあいているのも気になる。全体として従来の花の文化史を一歩でたものといえよう。（前川文夫）